

特 集

韓国京畿道外国語教育研修院における 現職日本語教師研修プログラム

現職日本語教師再研修のための教材開発全般について

許 明子

要 旨

韓国京畿道外国語教育研修院では韓国では初めて第二外国語として日本語を教えている現職日本語教師を対象に再研修を行うことになったが、筑波大学留学生センターはその研修プログラム開発の一環として韓国国内の研修で使用する主科目の教材として、聴解、読解、文法と誤用分析、会話、作文、教授法、特集の7科目の教材開発を行った。本報告書では京畿道現職日本語教師のインタビュー調査の結果報告、教材作成の経緯、教材内容、構成、概要について報告を行う。

本教材は統合シラバスによる授業運営を考え、聴解、読解、文法と誤用分析の3科目は「変化する日本語」「日本人の特質」「言語行動の韓日比較」の3つのテーマに基づいて関連性のある内容として教材開発を行った。会話ではプロソディ、アクセントを取り上げ、教授法では韓国の日本語教育事情を再認識し、学校教育の現場に応用が可能な内容を取り上げた。また、特集では日本語の七五調のリズム、言葉のあそび、落語を通して日本語の楽しさを体感できる教材を作成した。

【キーワード】現職日本語教師 研修プログラム 必須科目 教材開発

The Textbook for In-service Japanese Teacher Training of the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education : focusing on the core modules

HEO Myeongja

【Abstract】The International Student Center, University of Tsukuba, has produced core modules of Listening Comprehension, Reading Comprehension, Grammar and Error Analysis, Conversation, Composition and Teaching Methodology within the framework of the study program for teachers of Japanese language as a 2nd foreign language offered the by Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education.

These teaching materials are based on a lesson management, integrated syllabus with Listening, Reading and Grammar materials represented in three relevant sections: “The Changing Japanese Language”, “Special features of Japanese”, and “Korean-Japanese comparison of language behavior”. Each unit has two topics, with the technical skill and topic being connected closely.

【Keywords】in-service Japanese teacher, training program, core modules, teaching materials

1. はじめに

韓国の京畿道はソウル郊外の新興住宅地として近年人口の増加が著しく、現地の中学校と高等学校で第二外国語として日本語を選択する学校も増えてきた。京畿道外国語教育研修院では英語教師を中心に現職教師の再研修を行ってきたが、2005年初めて京畿道内の中等教育における第二外国語として日本語を教えている現職日本語教師を対象に再研修を行うことになった。2005年現在、京畿道内には約500人の日本語教師が中学校及び高等学校で日本語を教えており、これらの現職日本語教師全員に再研修を行うというプログラムがスタートしたのである。本研修プログラムがスタートするに当たり、2005年3月に京畿道外国語教育研修院と筑波大学留学生センターは学术交流協定を締結し、当センターが中心となって、研修のための教材開発、プログラムのコーディネートを担当することとなった。本プログラムは韓国国内研修(2005年9月12日~10月12日)と日本での海外研修(2006年1月10日~2月9日)がそれぞれ4週間ずつ行われた。

本稿では、韓国国内研修にあたり、当センターが研修のために開発した教材について報告を行う。

2. 教材の作成過程と概要

2.1 インタビュー調査

2005年3月に京畿道外国語教育研修院を訪問し、同年9月に研修を予定している現職日本語教師18名を対象にインタビュー調査を行った。インタビューでは、研修に対して期待していること、教材内容に関する要望などニーズ調査を中心に行ったが、韓国の第二外国語として日本語教育に関する現状を理解するためという目的もあった。日本の大学が外国の現職日本語教師を対象に再研修を行うという新たな試みは多様化する日本語教育の特徴の一部分を表すことでもあり、まずは現状把握、ニーズ調査から教材作成がスタートしたのである。

今回は第1回目の研修ということもあり、現職日本語教師の中でも年長者から研修を受けることとなり、平均年齢が40歳代後半から50歳代の教師である。そこで、教材作成を行う前に研修生の日本語能力の確認、研修のニーズ調査、韓国の中教育機関における日本語教育の実態について研修生18名を対象にインタビュー調査を実施した。このインタビューの結果について簡単にまとめると次のようになる。

<インタビュー調査について>

(1) 調査方法：京畿道外国語教育研修院における個別インタビュー形式

18名を3グループに分け、一人10分程度個別にインタビューを行った。

(2) 実施日時：2005年3月22日

(3) 対象者：京畿道内の高等学校で日本語を教えている現職日本語教師。

2005年9月の国内研修を受けることが予定されている40歳代~50歳代の教師

で日本語教育暦は18年以上。

(4) 韓国京畿道内の高等学校における日本語教育の現状

京畿道内の高等学校における日本語授業時間数：(1コマ50分/週あたり)

-) 2年生のみ：2コマ～3コマ(工業・商業高校)
-) 3年生のみ：3コマ(工業・商業高校)
-) 2年生、3年生：4コマまたは6コマ(人文系高校)

日本語学習者全体数：200名～500名

各高校における日本語教師数：1校に1名(15名)、1校に2名(3名)

各高校における日本語クラス数：3～16クラス

各高校における日本語クラスの受講生数：30人～38人

日本語教師の授業時間数：18コマ～21コマ(週あたり)

(5) 韓国の高校生の日本語教育現場の特徴

教師が日本語の授業において重点的に指導している項目

-) 日常生活及び旅行先で使える会話の練習
-) ひらがな、カタカナ、簡単な単語、文法
-) 日本との交流の大切さを教える
-) 言語的な表現、文化の違いを認識させ、未来志向的な世界観を教える

教師が日本語を教えるときに授業で感じる困難な点

-) 多くの学生が関心、興味を失ってしまう
-) 漢字の読み方
-) 文法項目の理解が難しい
-) 生徒から思いがけない質問があり、新しい日本の情報の取得が難しい
-) 現代日本の政治、文化、社会、芸能について教えたいが知識、体験がない
-) 直説法による指導
-) 学生の日本語力の差が大きいクラスの運営
-) 日本と韓国の歴史問題の認識から来る政治的な問題

学生の日本語の学習動機・目的について

-) 第2外国語として開講されている科目だから
-) 大学受験のため
-) 日本のアニメーションが好きだから
-) 日本語は他の第2外国語よりやさしいから
-) 日本のゲーム、マンガ、歌、歌手などの大衆文化が好きだから

(6) 国内研修への期待

日本語のブラッシュアップについて

- ・ 生の素材を使った日本語の表現を学びたい
- ・ 若者が使う流行語、特殊な場面で使う表現及び言葉を学びたい
- ・ 会話力を身につけたい
- ・ 日本語の自然な表現を使って話せるようになりたい
- ・ 擬態語・擬声語を学びたい
- ・ 日本の文化や社会、歴史について学びたい

教育現場への応用について

- ・ 新しい教授法、授業方法を知りたい
- ・ やさしい日本語を使って日本語を教える直説法を学びたい
- ・ 学生が日本語の興味を失わないようにゲーム、日本の歌などを知りたい
- ・ ニュース、ビデオ、インターネットなどの映像を利用した授業をしたい
- ・ 新しい教材を開発したい

(7) その他

- ・ 教師自身の日本語力を向上させたい
- ・ 日本人と会って話す機会がないので、日本語によるコミュニケーションについては不便を感じない
- ・ インターネットを利用して日本語を教えるのが苦手
- ・ 学生が興味を持っている日本の文化について知っておく必要がある
- ・ ドイツ語が専門だったが、1年間の日本語養成講座を受講して現在は日本語教師をしている
- ・ ある工業高校では週2コマかけて1年間5課までしか進まない

これらのインタビュー結果を通して韓国の中高等教育機関における第二外国語としての日本語教育の現状を把握することができた。また、韓国の現職日本語教師は、言語的能力を向上させるために日本語のブラッシュアップを行うとともに、高校の日本語教育現場に応用できる教授法を学びたい希望が強いことがうかがえた。このインタビューの結果を通して明らかになった研修に対するニーズ、日本語ブラッシュアップのための教材の内容を決めることから教材作成を始めた。

2.2 教材作成の経緯

前節で述べた研修生のインタビュー結果に基づいて教材作成の本格的な作業が始まったが、教材作成全体会議を3回開き、作成担当者を決め、各教材で扱う内容及びプログラムの運営

方針について話し合いが持たれた。

教材全体会議では次のような教材内容及び素材の案が出された。

<教材内容及びトピック>

漢字学習の方法及び指導方法：『ダーリンの頭ん中』を使用し、漢字の仕組みと面白さを感じる。

待遇表現：・日本語の独特の表現「～んですけど」から見られる日本語の待遇表現
・ら抜き言葉と待遇表現

日本文化と日本人：「日本人と桜」-なぜ桜が日本のシンボリックなものになっているのか。

現代の日本の若者言葉：若者言葉を理解するための背景、アクセントの指導。学生から日本の若者言葉に関する質問が出たときの対応方法や分からない若者言葉が出たときの調べ方の提示

現代日本語におけるカタカナ表現の理解と調べ方

日本と韓国の文化比較：・両国の教育事情の比較

- ・日本人と韓国人が持っている相手国へのイメージ比較
- ・両国民の気質の比較 島国と半島国の地理的特徴から来る両国民の国民性の比較

異文化接触：言語行動の違いや表現の違いから来る誤解

社会問題：両国の育児問題、教育問題、環境問題

日本語クリニック：各自の日本語表現や発音を見直し、日本人の言語表現をリソースとして利用できる機会を与える。

<教材の素材>

日本のテレビの情報番組を利用する。(クローズアップ現代、ニュース番組など)

新聞、エッセー、小論文などの読み物を活用する。

作文の素材として、絵文字、センテンス・ライティング、文字の導入方法などの実用的な文の書き方及び指導法を取り上げる。

言葉あそびを通して日本語の楽しさを体感する。アニメーション、流行語、インターネットの情報を活用する。

日本の日常生活の様々な場面を想定し、日本人の言語行動と韓国人の言語行動を比較する。韓国滞在経験がある人を中心に、日本と韓国の言語行動の違いについてスキットを作る。

Self-access として 1 か月分の各自の到達目標を提示し、各自の日本語力に合わせた自己到達目標を立て、日本語力の向上を図る。

教材作成全体会議で以上のような教材内容の案と素材が出され、これらの案と研修生のアンケート結果に基づいて、教材作成の基本方針が決められた。教材を作成するに当たっての基本的な立場は以下の通りである。

- (1)教材の内容は、韓国人日本語学習者の立場から考えられる日本語の特徴について、韓国語との比較を通して再認識できるものにする。
- (2)教材の目的は、現職日本語教師が韓国の中学校もしくは高校の教育現場で日本語を教えるときに役に立つ内容を中心に、日本語のブラッシュアップを図り、最終的には授業内容にも反映できるようにする。
- (3)学校教育の現場で学生から予想外の質問が出たときに、教師が慌てず、質問に答えられるよう自信をつけ、質問に答えられない場合は自主的に調べられる方法を取り入れる。
- (4)教材の構成は、3つの大きなテーマをユニットとして大別し、各ユニットには関連性のあるテーマをトピックとして細分する。
- (5)各トピックで扱う内容を様々な技能からアプローチし、各技能の授業内容が関連性を持って理解されるよう、統合シラバスによるプログラム運営を行う。
- (6)日本の伝統的な話芸を通して日本語そのものの面白さ、楽しさを発見する。

これらの基本方針に基づいて、教材の全体構成が決まり、各技能別に2人もしくは3人のグループで教材作成に取り組んだが、基本的には授業を直接担当する人が各技能の中心メンバーとして参加するようにした。また、1課分の教材作成が終わった段階で教材作成会議を開き、教材の内容の再確認、各技能別の関連性、各課のフォーマットの確認を行った。

また、教授法に関しては韓国の現職日本語教師の研修経験が豊富で、韓国の日本語教育事情にも詳しい国際交流基金ソウルセンターの三原龍志氏が担当することになり、研修時には教授法の授業を担当することになった。教材の全体構成については次節で詳しく述べる。

2.3 教材全体の構成

本教材で扱う内容は「変化する日本語」「日本人の特質」「言語行動の韓日比較」の3つの大きなユニットに大別され、各ユニットは科目別もしくは内容別にそれぞれ2つのトピックに細分化された。

統合シラバスによる授業運営に基づいて、聴解、読解、文法と誤用分析の3科目はそれぞれ関連性のある6つのトピックに分けた。会話・作文は、研修生自身の発音について意識化する機会を作るためプロソディ、シャドーイングの練習を行い、各自の音声について内省、意識化を図った。「特集」は、日本の伝統話芸に焦点を当てて、日本語のリズム七五調、言葉のあそび、落語の3つのテーマから構成されている。「教授法」は韓国における第2外国語と

しての日本語教育を再考し、実際の授業を考え、教案作成及びテスト・評価を考えた内容で構成されている。

<表 1> 教材内容全体図

	ユニット1 変化する日本語		ユニット2 日本人の特質		ユニット3 言語行動の韓日比較	
	トピック 1	トピック 2	トピック 3	トピック 4	トピック 5	トピック 6
聴解	ら抜き ことば	若者ことば	せっかちな 日本人	日本人の時間 意識	初対面	男ことば・ 女ことば
読解	あいまい 表現	マニュアル 敬語	せっかちな 日本人	日本人の時間 意識	初対面	男ことば・ 女ことば
文法 と 誤用 分析	「(ら)れる」 の意味	自動詞・ 他動詞	使役	副詞/ 擬声語・ 擬態語	授受表現	自作文法 教材作成
会話 ・ 作文	待遇表現	伝言	意見を述べ る(1)	意見を述べる (2)	比較・対比す る(1)	比較・対比 する(2)
		分類・定義・ 例示		意見を述べる		比較する・ 対比する

特集：日本語を楽しむ
1. 日本語のリズム・七五調
2. 言葉のあそび
3. 落語

教 授 法
1. 第2外国語としての日本語教育を再考する
2. 授業の実際を考える(1): 計画の立案、導入
3. 授業の実際を考える(2): 基本練習
4. 授業の実際を考える(3): 基本練習、応用練習
5. 授業の実際を考える(4): 計画を立てる
6. 評価・テストを考える

2.4 教材の概要

本教材の使用条件、目標、及び内容は以下のようになっている。

(1) 対象：韓国京畿道現職日本語教師約 500 名

(日本語教育暦は新規採用の教師から 20 年以上の教師まで、様々である)

日本語能力は中級から上級

(2) 目的：現職日本語教師の日本語ブラッシュアップ及び新しい教授法の取得

日本語によるコミュニケーション能力を養成すること

(3) 必須科目の構成：聴解、読解、会話、作文、文法と誤用分析、教授法、特集

(4) 必須科目総授業時間数：韓国国内研修3, 240分(4クラス編成)

聴解、読解、会話、文法と誤用分析：それぞれ90分×6コマ

教授法：90分×6コマ(ただし、2クラス合同授業)

作文：90分×3コマ

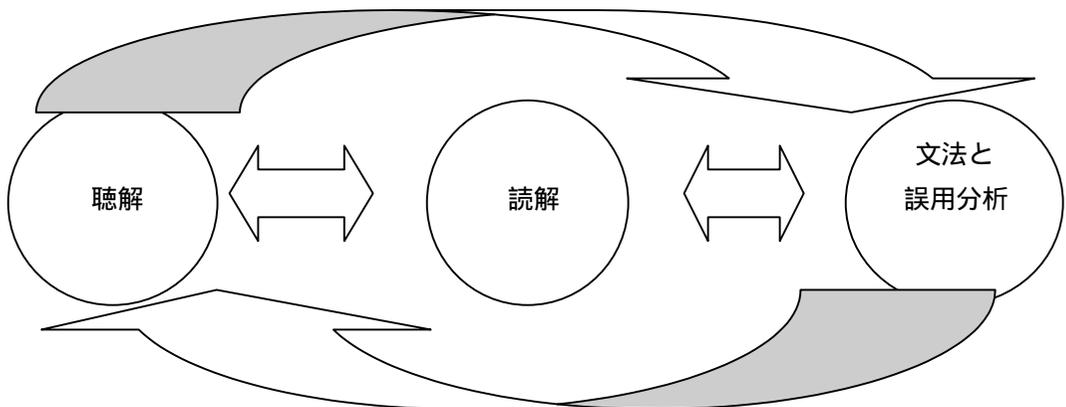
特集：90分×3コマ

(5) 授業運営方法：聴解、読解、文法と誤用分析の3科目による統合シラバス方式

「必須科目」は聴解、読解、会話・作文、文法と誤用分析聴解の4技能を主軸にし、その中で聴解、読解、文法と誤用分析は統合シラバスによる授業運営を考え、各トピックに関連性のある素材を選んで教材を作成した。

研修生は各クラス12名ぐらいで4クラスに分けられ、1日に2つの必須科目(午前中1科目、午後1科目)を受講することになっているため、各クラスは1日に聴解、読解、文法と誤用分析、会話の中でいずれかの2科目を受講することになる。つまり、各クラスは1日に2科目を授業し、2日で1トピックの4技能を学ぶことになる。このような授業のスケジュールを考えて、それぞれの科目が相互理解を助け、関連性のあるテーマ選びを進めてきたため、統合シラバスによる授業運営が効果的であると考えた。聴解で学んだ内容と関連のある読み物を読解で扱い、また文法と誤用分析でそれに関連する文法事項を確認するという流れによる授業運営を考えた。クラスによって聴解、読解、文法と誤用分析の授業の順番は異なるが、2日間は同じユニットの内容について異なる技能からアプローチすることになる。

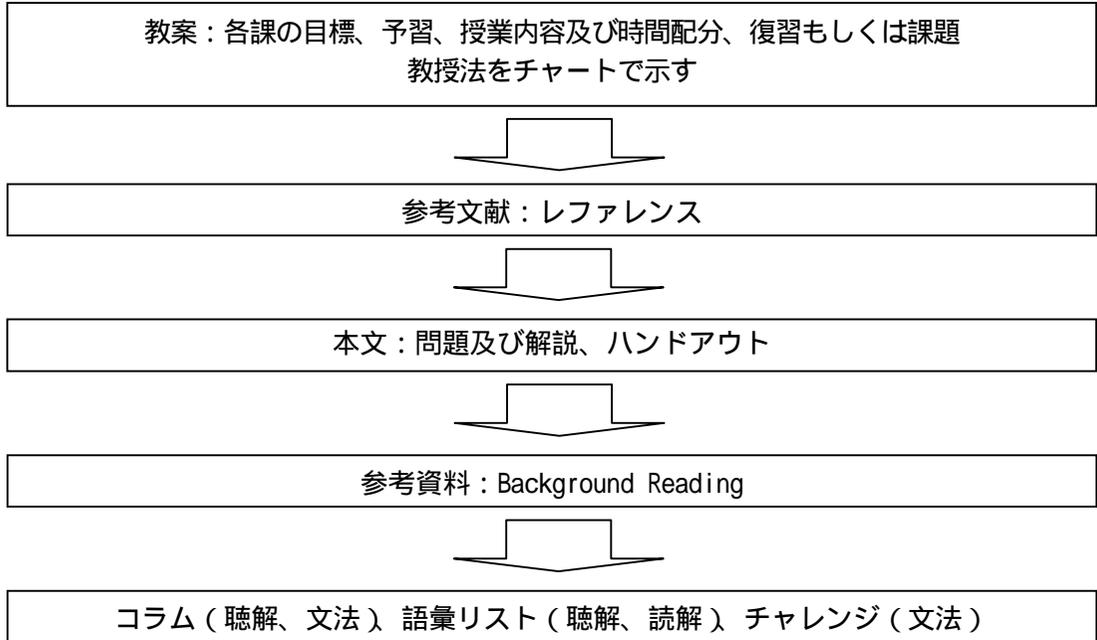
統合シラバス運営による各科目の関係は以下の<図1>のように表すことができる。



<図1> 統合シラバス運営による必須科目の関係図

(6) 各課の構成

各課の構成は京畿道外国語教育研修院から提示されたフォーマットがあったが、そのフォーマットを参考に、教材のバランス、授業運営を考え、次のような流れに統一した。



< 図 2 > 各課の構成

教案は各課の扉のページになっており、1枚の中に各課の目標、予習項目、授業内容、時間配分、復習もしくは課題、教授法（教育現場への応用方法）などについて表で表した。この教案は研修生に各課の目標を意識化させ、予習を促すとともに、授業の流れが把握できるようにするために提示したものである。また、学校現場で教案を立てる際の一つの例として応用できるようにする目的もあった。参考文献リストは各課の内容の理解を深めるための論文、文献などについてレファレンスを作成し、自習及び今後の持続的な学習の資料として提示した。本文に続く参考資料には各課の内容と密接に関係している論文もしくは文献の一部を紹介し、授業内容を発展させたり、要点が把握できるようにした。

さらに、聴解と読解では授業で扱う素材の文字起こし資料やスクリプト、関連する読み物を添付することにより、自習教材として利用できるようにした。聴解の「コラム」では韓国人日本語学習者の間違いやすい発音の練習コーナーを設け、文法と誤用分析の「コラム」では各文法項目と関連する日本人同士のコミュニケーションの例などを紹介した。これらのコラムの内容は各科目によって異なるが、時間的な制約で授業中に扱えないもの、授業内容と関連する読み物、発音練習などが含まれる。また、読解と聴解は語彙リストを

別冊として付け加え、予習を義務付けるとともに授業中に新出語彙の意味を即時に確認できるようにした。

(7) 日本語能力差による教材構成：複式授業

今回の研修では日本語能力の差を考慮したクラス編成ができず、各クラスの中に日本語力に差がある研修生が混在するということから、複式授業を行うことを前提に教材作成を行った。したがって、教材の難易度の調整が困難であったが、基本的にはクラス全員が必ず理解すべき内容を中心に教材作成を行い、日本語力が高い研修生のためには「チャンレジ」ページを作り、別のタスクを与えるような形式を取った。

3. 教材作成担当者

本教材の作成担当者は当センターの日本語教員の中で、本プロジェクトに興味を持っている教員が中心になったが、基本的に韓国における国内研修で授業を行う担当者がそれぞれの担当科目の教材作成に関わるようにした。ただし、教授法に関しては国際交流基金ソウルセンターで日本語を担当している三原龍志氏が協力者として教材を作成し、国内研修において実際に授業を行うことになった。教材作成担当者一覧は以下の通りである。

聴 解：西村よしみ、高橋純子、小河原世津、小野寺志津、杉浦千里、鶴町佳子

読 解：福留伸子、杉浦千里、鶴町佳子、小野寺志津

会 話：衣川隆生

作 文：衣川隆生、沖田弓子

文法と誤用分析：許明子、和氣圭子

特 集：酒井たか子、高橋純子

教授法：三原龍志

4. おわりに

今回、当センターでは韓国国内における現職日本語教師を対象に日本語ブラッシュアップを行い、さらには教育現場への応用を目的に教材開発を行った。本教材開発及び研修プログラムは、従来の日本語教育とは異なる新たな試みであった。つまり、教材を使用する対象が現職の日本語教師であり、研修を受けた後その成果が韓国の日本語教育現場に直接生かされる点で非常に特色のある教材開発が行われたと思う。

本報告書では現職日本語教師を対象とする研修プログラムの教材開発について報告を行ったが、今後とも海外の日本語教育現場のニーズに適合した実践的かつ現場中心的な教材開発を目指して修正、改訂に取り組んでいきたい。